

英語圏文化研究： 英語の構造と機能の史的発達に着目して

佐々木 一 隆

1. はじめに

本稿の目的は、英語圏文化について研究を行う際に基盤となる英語に着目し、史的発達の観点からその構造と機能を考察することにある。こうした見方をするようになったのは、筆者が所属する宇都宮大学大学院国際学研究科が1999年に発足以来、オムニバス方式の授業として毎年開講されている国際学総合研究 A「英語圏文化論」（2014年度より「英語圏文化研究」に名称変更）の一教員として担当するようになったことがきっかけである。特に、筆者が英語圏文化とは何かを考えるにあたり、英語がどのように関わっているかに興味をもつようになったことが研究の動機である。

このような英語圏文化と English の関係について、佐々木（2014: 24-25）では以下のような見解を述べている。

- (1) Wierzbicka (2006) によれば、英語の語や構文にはアングロ文化の影響が見られると論じている。筆者はこの考えに基本的に賛成する。例えば、*a reasonable man* のような連語の歴史的背景や、*I think* や *probably* などの認識や蓋然性を示す表現が英語で特に発達していることを見ると、そこにはアングロ文化が感じられるからである。こうした視点で文化が言語に与える影響についてさらに追究して行く必要があると思われる。しかしながら、その一方で、逆に言語が文化やものの見方に何らかの形で影響を与える可能性もあると考えている。例えば、主節でも従属節でも現代英語の基本語順は SVO に確立していることや、英語のパラグラフが最初に重要な考えを述べて後からそれを詳細に述べていくという形態をとることなどが挙げられる。こうした英語の構造的・機能的特徴がその話者のものの見方や文化などに影響を与えることもあるということで、この方向での研究も必要と考える。さらに、英語とその文化の世界的広がりを支えるものとして、アメリカを中心とする経済やインターネットなどの影響についても考慮する必要があると思われる。

英語圏文化を語る際には、以上のような言語と文化の双方向性と普及の要因

に注目して論じていくのが妥当であると考える。

本稿は、佐々木（2014）での論点のうち「英語の構造的・機能的特徴がその話者のものの見方や文化などに影響を与えることもある」に焦点を当てて多少なりとも詳述を試みるものである。

以下、第2節では英語圏文化とは何かを簡単に述べ、第3節で上述の大学院授業において筆者が講義を行った内容を紹介した上で、第4節で英語の構造と機能について史的発達の概要を述べることにする。以上をふまえ、第5節では現代英語の諸特徴が英語圏文化の定着と進展拡大にどのように影響しているかを論じて、最後に第6節で本稿のまとめを行うことにする。

2. 英語圏文化とは何か

英語圏文化とは何かを考えるには、Wierzbicka（2014）が展開するアングロ文化について理解しておく必要があると思われる。

佐々木（2014: 17-18）は、2006年に出版された Wierzbicka の *English: Meaning and Culture* (Oxford University Press) を紹介して、裏表紙の書評にもあるように、本書が英語とアングロ文化とのつながりを論じたものであると述べている。以下の引用（2）は、四部構成のもと9章からなる本書の概要を示している。

(2) Part I は英語を意味、歴史、文化の視点から論じたものである。Chapter 1 では英語がもつ文化の普遍性について、Chapter 2 では中東から見たアングロ文化の特徴について考察している。Part II では英語における一定の語に着目して、こうした語の中にアングロ文化が反映されていることを論じている。具体的には、Chapter 3 で *right* と *wrong* の成立とその文化的意味を、Chapter 4 ではアングロ文化として価値のある *reasonable* であることとその文化的起源を、Chapter 5 ではアングロ文化として別の価値をもつ *fair* であることとその文化的土台を考察している。Part III ではアングロ文化が文法にも反映されていること論じている。Chapter 6 は英語の使役構文と対人関係について、Chapter 7 では命題内容に対して話し手のスタンスを表明する *I think* のような表現が近代英語に生じたことを、Chapter 8 では *probably* に代表されるような英語の認知的副詞を取り上げ、その文化的意義を考察している。最後に Part IV で英語の「文化的考え」が世界においてもつ意義を論じて、本書の結びとしている。（佐々木

2014: 17-18)

Wierzbicka が主張するアングロ文化がすなわち英語圏文化そのものであるとは言えないのであるが、英語圏文化とは何かを考察する際に、アングロ文化の存在を認識することは重要であると思われる。

英語圏文化を有する地域を国別に挙げると、英語を第一言語とするイギリス、アメリカ、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドなどの国々となり、これらはアングロ文化を有する国々と一致すると筆者は考えている。こうした英語圏文化の地域とアングロ文化の国々との一致に基づいて、英語圏文化の主な特徴を列挙すると以下ようになる。

- (3) right と wrong の区別を重視する。
- (4) reasonable であることを重んじて中庸を好む。
- (5) fair であることを文化的土台とする。
- (6) 対人関係や話し手のスタンスを詳述する。
- (7) 学術的文章を書く場合は重要なことを先に述べて、その点から外れない形で論を展開する。話し方は正確で控えめな表現を多く用いる。本来的に日本語やアラビア語にそうした傾向がないのとは対照的である。

3. 国際学総合研究 A の授業より

この節では、宇都宮大学大学院国際学研究科博士前期課程のカリキュラムに位置づけられる国際学総合研究 A の授業を取り上げ、筆者が 2013 年度および 2014 年度の直近二年間に担当した箇所を紹介する。

3.1. 英語圏文化論 2013：英語の発展と World Englishes について

筆者が 2013 年度に担当した本授業のテーマは、「英語の発展と World Englishes について」であり、その概要は以下のとおりである。

英語圏文化の基盤となっている英語について、文献を読みながら、その歴史・世界的な広がり・多様性について考察していく。換言すれば、現在の英語を World Englishes と捉えることについて論じる予定である。また、英語圏文化とは何かという問題も取り上げたい。

使用文献：

- 1 『英語史』
- 2 『世界のことは小事典』
- 3 *Concise Compendium of the World's Languages*
- 4 *The Handbook of World Englishes*
- 5 *The Handbook of Language and Globalization*

予定：

- 4月25日 英語史から見る英語の諸特徴（講義）
- 5月2日 英語の世界的広がり と 多様性（文献講読）
- 5月16日 英語の世界的広がり と 多様性（文献講読）
- 5月23日 英語圏文化とは何か（ディスカッション）

3.2. 英語圏文化研究 2014：英語の発展と英語圏文化

筆者が2014年度に担当した本授業のテーマは、「英語の発展と英語圏文化」であり、その概要は以下のとおりである。

英語圏文化の基盤となっている英語について、ビデオと文献を見ながら、その歴史・世界的な広がり・多様性について考察する。また、英語圏文化とは何かについて、言語学の観点から論じた Wierzbicka (2006) や佐々木 (2014) などの文献も取り上げて、少しディスカッションしたい。こうした方針で進める授業の中で、英語圏文化の基盤となっている英語について、ビデオと文献を見ながら、その歴史・世界的な広がり・多様性について考察する。

使用ビデオ・文献およびその予定：

- 4月24日 *The Story of English. Volume 1 An English Speaking World*
BBC Video Library [千年の歴史と五大陸への展開]
英語の歴史と世界的広がり・多様性
- 5月8日 *Concise Compendium of the World's Languages* など
英語の構造的・機能的特徴（文献講読）
- 5月15日 Wierzbicka (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford UP.
佐々木 (2014) 「英語圏文化と English」『外国文学』63号.
英語の特徴とアングロ文化（文献講読）

オーストラリアとアメリカを訪問して

5月22日 英語圏文化とは何か（ディスカッション）

訪問したオーストラリアとアメリカでの経験や雑感も語る予定。

4. 英語の構造と機能：史的発達の観点から

この第4節では、英語がもつ構造的・機能的特徴を史的発達の観点から概観し、その特徴を明示する。英語はインド・ヨーロッパ語族に属しており、歴史的背景は次のとおりである。すなわち、紀元前5000年頃に話されていたと推測されるインド・ヨーロッパ祖語に起源をもち、その後10の語派に分かれた中の一つがゲルマン語派であり、さらにその語派が東・西・北の3語派に分かれたうちの西ゲルマン語派の後継の一つが英語に当たる。こうした歴史的背景をもつ英語は、一般に古英語（Old English）、中英語（Middle English）、近代英語（Modern English）の3つに区分される。近代英語のうち1900年以降を現代英語（Present-day English）と呼ぶことがある。これら三大区分の時期については諸説があるが、本稿では、中島（1979: 1）に従い、古英語を700～1100年、中英語を1100～1500年、近代英語を1500年～現在とする。

英語の構造の史的発達については、語尾屈折と語順を取り上げ、宇賀治（2000）第5章の形態論と第6章の統語論を主として参考にする。また、英語の機能については、現時点では古英語や中英語に関する史的発達の調査が十分ではないので、近代英語の一部をなす現代英語の事例に焦点を当ててその機能的特徴の一端に触れることにする。

4.1. 古英語

古英語は、名詞、代名詞、形容詞、動詞などの語類に複雑な語尾屈折の体系をもっていた（宇賀治 2000: 164）。例えば、古英語の名詞には男性・女性・中性の文法的性があり、単数と複数、主格・属格・与格・対格という区別があった（宇賀治 2000: 164）。一方、語順については、古英語では（代）名詞、指示詞、形容詞等の格語尾が大幅に保持されていた関係で、文の主要構成素の語順は近代英語の語順と比較してかなり自由であり、主要な語順型としてSVO、SOV、XVSOの三つが観察される（宇賀治 2000: 328-329）と述べている。

このように古英語には、名詞や代名詞などに複雑な屈折語尾があり、そうした屈折語尾を見れば、当該語を含む名詞句が主語なのか目的語なのかが判断できるため、固定した語順に依存する必要性が低く、かなり自由な語順が可能だったと考えられる。

4.2. 中英語

中英語の中頃までには屈折語尾の区別が水平化して少数になり、例えば名詞の語尾屈折は中英語期を通じて大幅に衰退した結果、中英語後期に単数では属格を除き主格、与格、対格が同形になった（宇賀治 2000: 168-169）。一方、語順については、Friesによれば、SVO 語順は遅くとも 15 世紀中頃 [中英語後期] までに十分に確立されたと推定され、以後、一般に動詞を中心として前の位置は主語の領域、後の位置は目的語の領域になった（宇賀治 2000: 338）と述べている。

このように中英語期には、屈折語尾の水平化とともに、当該語を含む名詞句がそれ自体で主語なのか目的語なのかが判断できなくなり、他の方法に頼る必要が生じて SVO の語順が確立されたと推定できる。

4.3. 近代英語

この 4.3. 節では、近代英語の中で特に 1900 年から現在に至るまでの時期となる現代英語に焦点を当てて、その構造的特徴と機能的特徴を考察する。

4.3.1. 現代英語の構造的特徴

宇賀治（2000: 164）によれば、近代英語は屈折語尾が消失した時期と言える。また、中英語期の後期までに語順が確立し、それが近代英語に継承されて現在に至っている。したがって、近代英語の中に位置づけられる現代英語も「屈折語尾の消失」と「SVO 語順の確立」という歴史上成立した二つの特徴を有している。

こうした歴史的過程を経て、現代英語は、名詞や動詞などの語尾屈折の体系が消失したという点で形態論的に簡素化されており、主節か従属節かの違いにかかわらず、節内部に生じる主語、動詞、目的語の語順が基本的に SVO に一定している点で統語論的にも語順が確立しているという構造的特徴をもつに至った。比喩的に言えば、現代英語は語順さえ押さえおけば語尾屈折には寛容である。

4.3.2. 現代英語の機能的特徴

次に、現代英語がもつ構造を道具として使って実際のコミュニケーションを行う場合、その機能的特徴はどのような姿になるのであろうか。換言すれば、実際の場面や状況あるいは談話の流れの中で、現代英語の語や文などを使って会話をしたり、文章を書いたりする場合に、機能的特徴はどのようなものかということである。

そこで、文章の場合の一端を見るために、以下のパラグラフを例示する。タイトルは Take a Break! (「一休みせよ」) である。この文章は筆者の意見が明確に述べられ、それを論理的に支持していくタイプであり、学術的な論文につながるものである。

(8) In today's busy world, it is easy to forget about the importance of taking time off.

Whether it lasts for a couple of hours or a few days, leisure time has specific benefits.

First of all, relaxation reduces stress that can lead to serious health problems. For example, some people spend a restful day watching movies or reading. Others play sports. Whatever the activity, they begin to feel physically and emotionally stronger. The next benefit is creativity. Individuals with hobbies such as photography, travel, and music develop new talents and get ideas that they can use at school or in the office. Finally, interests outside of work can lead to a positive attitude. For instance, when volunteers help children learn to read, they feel wonderful about what they have achieved. Then they feel like working harder when they return to their regular responsibilities. All in all, leisure time helps people stay healthy and has the additional benefit of allowing them to work more industriously and productively.

(Oshima and Hogue 2014: 52)

この例から分かるのは、本パラグラフでは筆者の考えをまず先に述べ、それ以降でいくつかの根拠を挙げるという英語固有の機能的特徴が見られ、情報伝達の効率がよいということである。すなわち、下線を施した2行目の文が筆者の考えを述べた topic sentence であり、学業や仕事を離れて余暇の時間をとることにいくつかの利点があることを述べている。この topic sentence 以降で三つの根拠を詳述している。すなわち、第一に3行目の First of all で始まる文において、リラックスすることが重大な健康問題を引き起こす可能性のあるストレスを和らげることを、

第二に 6 行目の **The next benefit is creativity.** の文において、創造性を豊かにすることを、第三に 8 行目の **Finally** で始まる文において、仕事以外での関心事が積極的な姿勢を生み出すことを論じている。最後に、**All in all** で始まる文において、以上 3 つの根拠を振り返って余暇の有効性を結論づけている。

なお、上述のパラグラフは **topic sentence** での論点から決して外れることはなく、統一性 (**unity**) があり、三つの根拠を詳述しているパラグラフの本体部分にも論理的なつながり (**coherence**) があることに留意されたい。

同様に、複数のパラグラフから構成される以下のようなエッセイにおいても、下線を施した、筆者の主張を示す **thesis statement** を比較的最初 (第 1 パラグラフの最後) に提示して、それ以降でその詳述を試み、最後に結論づけており、情報伝達の効率が高い。タイトルは **Body Language** で、この **thesis statement** は海外で仕事や研究をしたいならその文化のボディランゲージ (主に顔の表情、ジェスチャー、身体接触の有無) を学ぶことが重要であると述べており、このエッセイの文章も学術的な論文につながるものである。

(9) Communicating effectively in a new country and in a new tongue requires more than just learning the language. Nonverbal communication, including body language, is equally important. A person's facial expressions, bodily gestures, and physical attitude transmit powerful messages that go beyond words. Therefore, anyone who tends to live, work, or study in another country should learn the body language of that culture, including the acceptable ways to use the face, gesture with the body, and make physical contact.

First, let's consider how people use the human face to communicate. Research shows that people everywhere reveal basic emotions, such as happiness, sadness, excitement, and confusion, through facial expressions....

The gestures that people make with their heads, shoulders, arms, and hands are another important means of communicating....

In addition to facial expressions and gestures, physical contact or the lack of it, is a key aspect of body language....

In short, body language is an important form of communication that varies from place to place. When people travel, they should not presume that the rules for body language

in their home culture apply everywhere else. In fact, just as people focus their attention on grammar and vocabulary to master a language, they should devote time and energy to learning the body language of a new country or culture.

(Oshima and Hogue 2014: 199-200)

以上のような学術的なパラグラフやエッセイが示す機能的特徴は、英語が長年の歴史から多くの経験を経て到達したものと考えられるが、今や普遍性があり、英語に固有な特徴とは言えないかもしれない。例えば日本語で学術的なエッセイを書く場合にも同様のことが求められるからである。しかし、本来的には日本語や中国語の場合は結論を後で述べる傾向があるし、英語とは異なる論理的なつながりを有する言語も見られるので、本節で論じた機能的特徴は本質的に現代英語に見られる特徴と筆者は考える。

最後に会話の場合についても触れておきたい。Wierzbicka (2006: 25-34) によれば、アングロ文化を背景にもつアメリカ人の話し方には正確で控えめな表現が多いのに対して、中東文化を背景にもつシリア人の話し方には感情を表面に出し、正確さに欠ける表現が多く見られるという。

5. 現代英語の諸特徴が英語圏文化の定着と進展拡大に与えた影響

この節では、現代英語の構造的・機能的特徴が英語圏文化の定着と進展拡大にどのような影響を及ぼしているかについて考察する。

現代英語における語彙や文法などの構造的特徴および文章や会話などの機能的特徴は、もともと英語圏文化から影響を受けて言語化されたと考えられるが、一旦そうした言語化が成立すると、逆に英語圏文化に対してさらなる定着と進展拡大を促すものと考えられる。すなわち、現代英語に内在している語彙、文法、文章や会話のパターンなどが、英語圏文化に属す人々のものの考え方や文化に影響を与えるということである。このような見方をすると、2節で掲げた以下のようなアングロ文化としての英語圏文化の諸相は、現代英語の構造的・機能的特徴によって影響ないし規定されることになる。

- ・ right と wrong の区別を重視する。 [= (3)]
- ・ reasonable であることを重んじて中庸を好む。 [= (4)]
- ・ fair であることを文化的土台とする。 [= (5)]

- ・対人関係や話し手のスタンスを詳述する。 [= (6)]
- ・学術的文章を書く場合は重要なことを先に述べて、その点から外れない形で論を展開する。話し方は正確で控えめな表現を多く用いる。本来的に日本語やアラビア語にそうした傾向がないのとは対照的である。 [= (7)]

そこで、4.3 節での議論をふまえて、現代英語の諸特徴が英語圏文化に対してどのような影響を与えているかについて構造的特徴、機能的特徴という順で考察したい。

4.3.1. 節で述べたように、現代英語は、歴史的過程を経て名詞や動詞などの語尾屈折の体系が消失したという点で形態論的に簡素化されており、主節か従属節かの違いにかかわらず、節内部に生じる主語、動詞、目的語の語順が基本的に SVO に一定している点で統語論的にも語順が確立しているという構造的特徴をもつに至った。比喻を用いれば、現代英語は語順さえ押さえておけば、語尾屈折には寛容である。こうした現代英語のもつ簡素性と寛容性は英語圏文化の人々に影響を与えている可能性がある。

他方、4.3.2. 節で論じたように、学術的なパラグラフやエッセイには筆者の意見をまず先に述べ、それ以降で根拠などを詳述するという現代英語固有の機能的特徴が見られる。また、話し方としては正確で控えめな表現が多い。このような現代英語のもつ論理構成や正確で控えめな面も英語圏文化の定着に影響を与えている可能性がある。

以上、現代英語の構造的・機能的特徴が英語を第一言語とする英語圏文化の国々での定着に貢献していることを見たことになるが、そうした二面性の特徴は英語を第二言語ないし外国語とする国々への進展拡大にも貢献しているのではないかと考えられる。現代英語がもつ寛容さ・簡素さ・伝達効率のよさなどが起因しているのではないだろうか。

6. おわりに

本稿では英語圏文化研究を行う際に基盤となる英語に注目し、史的発達の観点からその構造と機能を考察することを目的として、特に、佐々木 (2014) 論点のうち「英語の構造的・機能的特徴がその話者のものの見方や文化などに影響を与えることもある」に焦点を当てて多少なりとも詳述を試みてきた。

歴史的に見ると少なくとも構造的に（場合によっては機能的にも）大きな変貌を遂げた現代英語は、その言語的な寛容さ・簡素さ・伝達効率のよさがゆえに、英語を第一言語とする国々に留まらず、広く第二言語や外国語とする国々においても普及したのではないかと推測される。こうした英語圏文化の世界的な普及については、英語の機能的側面に関する史的発達の調査とともに、今後の課題としたい。

参考文献

- Campbell, George L. (1995) *Concise Compendium of the World's Languages*. Routledge.
- Coupland, Nikolas (2010) *The Handbook of Language and Globalization*. Wiley-Blackwell.
- Kachru, Braj B., and Yamuna Kachru, and Cecil L. Nelson (2009) *The Handbook of World Englishes*. Wiley-Blackwell.
- 中島文雄 (1979) 『英語発達史』改訂版、岩波全書。
- Oshima, Alice and Ann Hogue (2014) *Longman Academic Writing Series 3: Paragraphs to Essays*. Fourth Edition. Pearson Education.
- 大塚英語教育研究会 (2013) 『大塚フォーラム』第31号、大塚英語教育研究会。
- Sasaki, Kazutaka (2013) “Anna Wierzbicka (2006) *English: Meaning and Culture*, Oxford University Press. [Chapter 4 Being REASONABLE: A Key Anglo Value and Its Cultural Roots].” Paper presented at the monthly meeting of Otsuka Circle of English Education, September 14, 2013.
- 佐々木一隆 (2014) 「英語圏文化と English」『外国文学』第63号、17-26頁。
- 柴田武編 (1993) 『世界のことば小事典』大修館書店。
- 宇賀治正朋 (2000) 『英語史』開拓社。
- Wierzbicka, Anna (2006) *English: Meaning and Culture*. Oxford University Press.

参考映像資料

The Story of English. Volume 1 An English Speaking World. BBC Video Library